新著紹介

認識の對象

ハインリッヒ、リッケルト著
文學士　中川得立　譯

本譯書は、獨逸西南學派の大成者たるリッケルトが、其認識論の根本思想を展開せる Gegenstand der Erkenntnis の第二版の譯譯に、其後氏が千九百九年の「カント研究」に於て公にせる重要なる論文 Zwei Wege in der Erkenntnistheorie の「殆んど原文の儘なる散逸なる紹介」――譯者の謙辭を拔にすれば、譯者の取捨を加へた自由譯と云ふの適切なるを思はしむる――を附錄として添加したのである。

リッケルトに關しては、既に屢々多くの人に依つて、或は雜誌に、或は著書に、紹介或は批評せられ居る所であつて、今改めて贅する必要もないのであるが、本書は氏の認識論上の立場を明にしたものであつて、西南獨逸派の思想を理解せんとする者に取つて、先づ其第一指を染むべき主要なる述作たる事勿論である。本書の目圖する所は飽く迄認識論であつて、心理學でも形而上學でもない、「本書は心理學者や形而上學者に取つて、既に其前提となつて居るもの、從つて心理學的又は形而上學的研究の對象となり得ない或ものを展開しやうとする」。凡そ現代獨逸哲學の傾向は著しく認識論的である。殊に所謂論理派の主張せんとする所は、認識論の根底の上に學的哲學を建設し、心理學及形而上學と全然絶緣することに依つて一切の獨斷を去り、カントの所謂コペルニカス的轉回に依つて、成し遂げうるべくして未だ完成せられなかつた純批判主義を徹底せしめ、その根本精神を顯揚闡明せんとするにある。彼れの出發せんとする根本假定は、所謂無假定的假定不可避的假定である。認識論に於ける最終の根底たるかゝる根本的事想を何處に認むべきか。

こゝにゲッチンゲン學派、西南學派、マールブルヒ派等の別を生ずる。フッサールは卽彼の所謂クロノメーターを以て計量することの出來ない內在的時間、ベルグソンの言葉を借るならば、純粹接續としての時間、或は純我純意識として現はさるべき直接經驗を、自然（ナチュール）と區別して現象（フェノーメン）と見、之を彼獨得の方法に依つて分析せんとする。之所謂彼の現象學的立脚地である。マールブルヒ派に至つては、かゝる不可避的の假定を方法(die Methode)の中に求め、無制限的者の制限、無規定的者の規定の中に求め、無限の問題、無限の過程としての思惟の中に一切を根底づけんとする。

而して吾がリッケルトは、「疑ふと云ふ事を無限に續行し、最後に疑ふとして疑ひ得ざる有ゆる認識の根底を形づくる前提」たる超越的不許不の上に立ち、こは疑其事が何等かの意味を有する限り必要なる前提として、不可避的のものなることを明にせんとする。卽彼は認識の對象は、多くの獨斷論者の信ずるが如く、超越的實在に非ずして、實に超越的不許不に存することを明示することに依つて、論理派の立脚地を最も旗幟鮮明に代表するものである。されば彼自も明言する如く、本書は嘗てプラトーンが、不許不は存在に先だち、「善」は實在を超越すると言つた」。彼の所謂「古めかしい思想」を新なる純化せられたる形式に於て論證せんとするものであつて、此意味に於てリッケルトの認識論上の立場

は、目的論的プラトーン主義と云ひ得るであらう。

此立脚地を明にする爲に、リッケルトは先づ本書第一章に於て、認識論の根本問題より說き起し、第二章に於て內在論の立場を論究し、第三章に至つて初めて、表象と判斷との別を明にし、認識は表象に存せず判斷に存することを確定することに依つて、對象を不許不として論定し、更に第四章に至つて、不許不が超越的として認識の客觀性を確保する所以の根底を論證し、最後に、第五章に至つて、かゝる先驗的觀念論は、特殊科學の立脚地たる經驗的實在論と相反噬しないのみか、只々前者に依つてのみ後者は認識論的に確乎たる根底を得るものなることを明にせんと試みて居る。

然るに其後リッケルトは「認識論の二途」なる論文に於て、超越的不許不として規定せられたる認識の對象は、未だ心理的著色を脫せざるものとして、先驗的觀念論に於けるかゝる方向を、先驗心理的と名け、之と異つて全然認識作用を顧慮することなく、純論理的に對象を規定し、之を超越的價値なりと斷じ、かゝる方向を稱して先驗論理的となし、認識對象の規定として取るべき唯一の正しき方向は後者なることを明にした。之卽本譯書の附錄とし添加せられたものである。本論文は、リッケルトが、カントの先驗心理學の範圍より脫出して、彼等自はカントの眞精神として高調せんとする、ボルツアノ流の純論理主義への轉向を、最も興味深く表明せるものとして、甚だ意義ある述作と云はねばならぬ。こゝに於て我々はリッケルトを最も明瞭なる純論理派の代表者として見る事が出來るのである。

かゝる純論理派の認識論上の立脚地が、如何なる點迄我々を滿足せしむるかは、今此に論述すべき限りでないと思ふが故に、それは他日の機會に委ねて置かう。只本書が種々の議論があるに拘らず、現代論理派の主張を理解し、其根本思想を把握せんとするものに取りて——否認識論てふものに理解の一步を踏み入れんとするものに取つて不可缺の手引であることは、吾々の斷言して憚ない所である。

次に本譯書に就いて一言したい。譯文は極めて流暢、些の澁滯の跡を止めず、全然飜譯的臭味を脫し、間々巧妙なる譯語譯文に啓發せらるゝ所少くはない。勿論余は悉く原文と比較對照したものではなく、只一部分に過ぎないのであるが、近く原書を稍精讀し得る機會を有して居た自分に取つて、如何なる程度迄本譯書が、原書の意味せんとする所を咀嚼理解し、巧妙なる而して、よく精練されたる邦語に譯出せんと努力し、又其結果に於て確に成功して居るかを安んじて言明し得ると思ふ。只慾を云へば今少し原書に忠實に——否或は寧ろ原書の字句に拘泥して——勿論よき意味に於てゞはあるが——譯出——しかも尙本譯書に見るが如き簡頭にして流暢なる趣を失はないことが出來はしなかつたらうかと云ふ——或は不當かも知れない——願望である。有體に云へば、リッケルトの思想其物も、文章其物も、決してマールブルヒ派のコーエンなどの著書と比較して難解であるとは云ひ得ない。ヴィンデルバンドのものに見るが如き美文的要素なく、カントの文の如く無暗に長たらしくもない、其文平明にしてしかも行論の透徹明晰なる點に於て、リッケルトは確に、論鋒銳利なる思想家とし

て許されなければなるまい、彼の述作の如きは、原文の儘を邦語に譯出するに、敢て譯文の臭味を帶びないであらうと思はれる程に、其の發表に文學的色彩を脆却して居る。勿論之を以て本譯書が原書に不忠實であるとは更々云ふのではない。外國語を邦語に譯出することの如何に困難なるかを、他人にも劣らず認め得ると思ふ自分に取つては、本譯書が如何に多くの點に於て敎ふる所の大であつたかは、こゝに譯者に對して謝せなければならない。殊に哲學研究就中認識論的論究述作の極めて尠少なる我が學界に取つて、かくの如き名著が譯出せられたことは誠に喜ぶべきことであると思ふ。本譯書の如きは寧ろ一個の獨立なる述作として、認識論的研究に進まんとするものゝ必讀の入門書として、推奬すべき價あるものと思ふ。兎に角先には紀平學士の認識論の著あり、今又中川學士の此好譯あり、此種の述作の陸續公にせらるゝは、此思想界の風潮の那邊に進展しつゝあるかを覩ひ得る心地して、甚だ愉快に思ふ次第である。（岡野留次郎）

國民道德要領

文學士　吉田靜致
藤本慶祐共著

歐洲戰亂に鑑みて、我が國民は戰後激烈なる國際的競爭場裡に、世界的公民として活動すると同時に、日本國民として活動するの覺悟を決めなければならぬ。然してその活動の道德的基礎は時勢に適應した國民道德であるべきであつて、國民道德の研究詮明は極めて重要であり、亦實に焦眉の急なりとして著者が平素の懷抱を、國民敎育に從事する人々の參考の爲めに著はされたものである。

我が國民道德の由來する遠き神代の昔より今に到る迄の國民道德の發達變遷をば、第一章より第七章に納めてある。第一章我が國民道德の由來、第二章祖先尊崇と家族制、第三章神道の發達、第四章儒敎の發達と其の影響、第五章佛敎の發達と其の影響、第六章武士道の發達及び其の精神、第七章敎育に關する勅語の發布の章下に現有の國民信仰が大陸傳來の印度思想支那思想に影響せられ、歷史の發展に連れて如何に特色ある國民道德が起つたかを略々歷史的に叙述し、第八章國民道德の特質に於て、我が國民道德には顯著なる二大特質――一、忠孝の一致、二、忠君愛國の一致――の存することを闡明し、最後に第九章我が國民道德の倫理學的觀察に於て學的考察に及んで居る。

一國民、一民族の道德をば歷史的に說述することは、昔に溯つて道德の事實を調べるのであるから決して容易ではないが、道德そのものゝ究明にも資するものであつて、學的價値があり此の種の研究の發表せらるゝことは願はしいことである。又時勢の要求と沒交渉でも無く、敎育者の參考にもとの著者の望みは充分に滿たされるであらう。菊版四二九頁、東京寶文館發行、定價壹圓五十錢（尾生光三郎）

宗敎哲學

文學士　石原謙著

本書は『哲學叢書』の第七編として、宗敎哲學の地位及び問題を組織的に說明せんとしたものである。著者は自序の中に『單に初學者を目的とした序論的のもの』と云つて居るが、然し宗敎哲學概論としては內容の最もよく調つたものであり、特に此方面に殆